

灰原、妻になるってよ

灰泥

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

灰原哀を自分のものにしようと、黒の組織の一員である男は彼女を誘拐した。休む事なく度重ねられる快樂に、幼きその身体に耐えきれることができず、遂には。

目次

灰原、妻になるってよ	1
D V D 第一部	11
第二部D V D (終)	21

灰原、妻になるつてよ

何処かのマンションにあるワンルーム。

ベッドと必要な家具しか揃っていない、殺風景なその一室に、灰原哀はいた。

この部屋に来て閉じ込められてからどれだけの日数が経ったのだろうか。

ベッドの上で四つん這いになっている哀はふと考えたものの、それよりも下半身から襲ってくる快楽に悶えては喘ぎ声をあげてしまった。

「ん、ああっ……んん、はあああああっっ!？」

「おいおい、考え事か？ シェリー、いや今の姿じゃあ哀か？ しっかし、クールでスレンダーだったお前がこんなお子様体系になるとは残念だ」

寝バックという体制で、四つん這いになり、小ぶりなヒップを突き出す格好になる。

背後から哀を犯しつつ男は哀の背中や首筋を舌で嘗めながら嘲笑った。

「はっ、ああっ、はひっ……そ、そう云いながら、この身体にッ、欲情ッして、犯しているのは誰なのかしらっ、へ、変態さ、んんうんっっ」

「ははっ、体型よりもお前を好き勝手にできるつていう興奮だよっ」

哀の挑発にそう返しながら、男は腰を激しく動かしては膣奥に引いたり押し込んだり

して、哀の子宮を押し当てていく。

乱暴な抽送で頭先端が子宮の入り口をぐりぐりつと押しつけられるたびに哀は快感に背中が震える。

そして、容赦なく子宮を叩く度に艶めかしい声を叫び出す。

「ひんっ！ あっはっ、ひぐっう……っ♡」

「はは、クールぶっているが、もう快樂に負けてるじゃないか」

「ち、違うう、ま、まけてにゃんか、あんっ、あっ、はああっ、あんっ、ひいいんっ、ち、乳首、らめえ！」

哀の嘆願など知ったことかと言わんばかりに、バック越しで、胸を揉みしだいて乳首を摘まむようにしてそれを指で挟むと、哀は一際強く嬌声を上げた。

そして、突き穿つ腰の動きを加速し、肉棒を奥深くへと突き入れていき、膣奥にある子宮を強く打ち叩く。

そして何度か打ち叩いて、子宮を貫いた瞬間。

「やっ、やああっ、そこっ、だめ、うっんうううっ♡ はっ、ああああっ♡」

哀が絶頂を迎え、快樂に満ちた獣のように叫ぶのと同時に、男の肉棒が貯めていた子供の全てをそこに流し込んだ。真正正銘の膣内射精。

幼き身体である哀の体内を白く染め上げるといふ背徳的な事実によって身体を震わせつつ、

爆発じみた勢いで射精する。

「ふうふう………っ」

射精が収まり、締りの良い哀の膣を名残惜しそうに引き抜く。脱力感と倦怠感がまわりつくが、それよりも、四つん這いでへたり込む哀を後ろから見つめる。

ちよūdōよい場所で、お尻を上げて痙攣している哀の小さな膣と尻がよく見える位置だ。

「あ——♡——ああっ——はああん♡」

快楽の余韻に浸っている哀の膣からごぷりと治りきれなかった精液を垂れ流れてきた。

そして大量の精液を注ぎ込まれたせいか、僅かに膨らんでいるようにも見える胴回り。

「っあ、ふう………っ♡」

浸っている哀を尻目に、男は、部屋の片隅に置いてあった袋から何かのセットを取り出す。

それは何処かのメーカーセットで、男は開けていく。

出てきたそれを見て、イヤらしく笑う男は浮き足立って哀の元に戻った。

「おい、これに着替えるぞ」

男は哀に見せつけるように、それらを眼前に突き付けた。

「な、なによ、それ……っ」

哀が引き気味になりながらも、どこか興奮を覚えながら、言葉を紡ぐ。

取り出し見せつけたそれは、純白のシースルーのミニスカウエディングドレスだった。レースが多く可愛らしさはあるものの、シースルーが強すぎて、殆どが透けて見える。更には

「ははっ。こいつはな、日本のコスプレショップで販売してたのを購入したんだ……お前に似合いそうだなあ」

「い、いやよっ、そんなの……っあんっ」

しかし、哀の拒絶は受け入れられず、着せ替え人形のように、着せられていった。また着替えさせられている最中に。

「や、やあ、何して、ひいんっ♡」

幼胸を揉まれては、乳首を引っ張られ。

「ぐ、グチュグチュしないでっえ、や、やあ♡ クリトリス、ダメえ♡」

股間を弄られては、クリトリスを摘まれては剥かれたり。

「ちゅっ♡ んんっ、や、キス、しないでっ♡」

口づけと共に舌を絡ませられたりと、弄ばれていった。

「つうう……」

「はは、似合ってるじゃないか」

透明なレースに包まれたミニスカウエディングドレス。

上半身はシースルーで作られたインナーのみで、双丘と勃起した乳首が見えていた。

下半身は、同じシースルーによる、軽く薄いミニスカが着せられ、その下には黒いTパンティが見えていた……しかし、そのパンティも蜜質の液体を吸い込んで、変色していた。

シエリーの時でさえ、着せられたこともない服装に、哀は落ち着かずただ落ち着かない様子と共に、どこか期待する目で頬を赤らめて男を見つめる。

「さてと、それじゃあ……撮影といくか——」

「つえ」

予想していた言葉とは全く異なる展開に、哀の戸惑いと失望の声、部屋に響いた。

その声を聞いた男は笑い、哀は片手で口を抑えた。

「ははっ、こりゃいい。哀は写真よりも犯して欲しいのか？」

「ち、ちが……」

しかし、哀の否定の言葉が最後まで紡がれることはなかった。

ズボンのチャックから勢いよく飛び出た肉棒に釣られて、視線が追う。

言葉を紡ぐよりも、そつちに目を向けてしまい、肉棒から目を外すことができない。

「……………」

哀は、喉を鳴らしていた。

知らずのうちに、恍惚とした笑みを、背徳に溺れた笑みを浮かべて、四足歩行でゆつくりと肉棒に近づく。

しかし、それは男の手が哀の頭を押さえたことで止められた。

「おっと。肉棒が欲しければ、誓いの言葉を立ててもらおうか……。灰原哀よ、汝は肉嫁として俺に奉仕し尽くすことを誓うか？」

「え……………」

「折角、ウエディングドレスを着ているんだ。それ相応の事をしたくてなあ」

「そ、そんなの……………」

無理に決まっていると普通ならば答えるだろう。

男は哀の敵であり、自分を監禁した犯罪者だ。

許されざる敵……………のはずだ。しかし。

「誓えないなら、今日で監禁生活は終いだが……………今更コレの味、忘れられるか？」

限界まで反り立ち、龟头は赤く充血した剛直。

太くて、硬くて、熱い肉棒を哀は見つめる。

膣道をこれでもかと、あの逞しい触感と共に蹂躪されたあの感覚。蹂躪される度に襲いかかるあの快楽。

肉棒から放たれる、喉奥をつんざく濃厚な精液の味。

雄々しい肉棒が、精液が、快楽が、一番に愛おしかつた。

「だったら残念。 今日でお前は自由——」

「ぐやあー！」

哀は叫んだ。

ミニスカウエディングを翻して、男を押し倒して叫んでいた。

「誓う、違うからあ♡ 貴方に尽くすう、肉嫁としてえ、尽くしますからあ♡ 一番奥

まであなたのつ、オチンポで一杯にしてください♡あ♡」

『灰原っ！』

その瞬間。脳裏にフツ、と。誰かが哀を呼ぶ声が聞こえた。幼さとは裏腹に、強い信念を持つその言葉はどこか聞き覚えがあつて、心が落ち着くような……そんな、気が。

だが、すぐにそれは消失した。

次いで、哀の脳裏に浮かんだのは、快楽を求める自らの声と、Tパンティ越しから雌穴が濡れ出したのを感じた。

哀は男の下半身に移動し、肉棒を前にして誓いの言葉を述べる。

「くくつ、折角の美貌が台無しだなあ」

淫靡に満ちた哀を見て、男は満足していた。

ようやく手に入れた。ずっと欲しかった女を。幼くなったのは驚きだが、そんなことは些細な事だ。

これからずっと一緒なのだ。成長していくにつれて、出来るプレイも増やしていこう。そして、このウエディングドレスだけでなく、様々なコスプレをさせるのも良い。

「楽しみだなあ、哀」

「ちゅっ♡ んちゅうう♡ は、はい、旦那様♡ あ、あの精液を飲みましたので、次は、私の膣に……♡」

そう言って、哀はミニスカと共にTパンティを横にずらした。

既に愛液塗れとなった幼きスジと、ひくひくと求める膣を見て、男は笑って肉棒を添えた。

DVD 第一部

ビデオカメラの録画機能を作動したのを確認した男は、「哀」と呼びかけた。

ビデオカメラの近くにいた少女、灰原哀は返事をして男の元に歩き、ベッドの上にいる男の傍に寄り添った。

彼女の服装はいま、背中と胸元が大胆に開いているセクシーなニットのワンピースセーターだ。

大凡まだ小学生の着せる服ではないのだが、別に人それぞれであり、男にとっては哀がこれを着ているだけで興奮しているのだからそれでいいのだ。

「さて、今日は何をする日だったか？」

「……今日は、ビデオ撮影よ。江戸川くん、いえ工藤くんに送るための、別れの撮影」

「正解そして同時にお仲間との別れでもあるけどな……なんで工藤が先に出たんだ？」

ニヤニヤとイヤらしい笑みを浮かべる男。答えは既に理解していると云わんばかりだ。

哀はふいと顔を晒して答えようとはしないものの、別に男は気にしない。

もうすでに哀は男のものになっているのだから。

男の両手は開いた背中から両手を侵入させて、哀の幼胸と手に収まる程の小ぶりな尻を揉みしだいていく。

「やんっ……んんっ、んう♡」

それだけの愛撫で哀は乱れ、抑えきれない欲情の声を漏らす。そして、男に寄りかかって、その快楽を求めていた。

やがて男は小ぶりな尻からクリトリスに手を伸ばし指で転がしていく。コリッコリツと刺激されるたびに気持ちよさで声を上げる。

「んううっ♡」

「はは、聞くまでもなかったか？ それにこの乱れ具合で、もう答えは出てる……かつと

！」

「んひいひい♡」

男が力強く乳首を引っ張り、クリトリスを強く摘むと、哀は悲鳴を上げると同時に下半身が大きく震えては男にへたり込む。

すると彼女の太腿から一筋の水滴が垂れ落ちてくる……どうやら絶頂してしまったようだ。

「……おいおい、折角の服が台無しじゃないかよお！ こりやあ着替えが必要だな」

男はわざとらしく声をあげては、哀の着ていたワンピースセーターを脱がす。

セーターを脱がされ、穴あきパンツ一枚になった哀。

首元や幼胸はキスマークで埋め尽くされ、幼胸から強く象徴するようにピンク色の乳首が立っていた。そして穴あきパンツの穴からは愛液がトロトロと垂れている。

その姿に男は興奮し、思わず唇を舌で舐めてしまう。

「さてと、早速着替えてもらおうか」

男はそう言ってベッドの下から取り出したのは、白い光沢のあるハイレグバニースーツだった。

男は楽々と哀を抱き上げると、人形のように簡単に着替えさせていく。

バニーコートに哀の脚を入れさせると同時に股とお尻に食い込ませた。

「ひぎん♡」

穴あきパンツの為、モロに股間が食い込んでしまうものの哀は悲鳴どころか喜鳴を上げる。

そして、男は哀の胸まで一気に引き上げた後に背中中のチャックを締めることで、完成した。

「う、うう♡」

赤みがかかったウェーブ状の茶髪に白いハイレグバニースーツ……とても扇情的でより一層に男を興奮させる。

「もう我慢辛抱出来んっ」

「んんうっ♡ んっ、んんっ、んんむっ♡」

男に勢いよくキスをされて目を見開く哀であったが、直ぐに男のキスを受け入れては、舌を絡ませていく。

「レルッ、チュッ、チュルルルッ。レロレロッ、んんっ、おいひい♡ もっと、もっとお♡」

哀は自身の両手を男の首に巻き付け、絡めてくる男の舌を舐め、吸い付く。

先ほどまでに落ち着いてビデオ目的を喋っていた哀が、いまでは蕩け切った表情で男の舌と唇を求めて売女のように強請っていた。

更に哀の細く短い右手は既にテントを張っている男の股間に手を伸ばし、イヤらしい手つきでズボン越しに掌で摩り、触っていく。

「プハッ、なんだもう欲しいのか？」

「あっ、ほ、欲しいわ。あなたの、欲しいの……」

唇と舌が離れて哀は寂しげな顔を浮かべたが、男の体にすぐさま答えながらも右手は止めることなく動いている。

しかし、哀の右手首は掴まれ、動きを止められてしまう。

「なにが欲しいんだ、言ってみろ。云えなきやお預けだ」

「え、あ、それは……」

「欲しいんじゃないのかあ？ お前を気持ちよくさせるものが、それが欲しくて俺の妻になつたんだろお？」

男はニヤニヤしながらズボンのチャックを下ろし、チャック越しからそれを取り出した。

大きく勃起した肉棒は痙攣しながら生き物の様に動いており、哀は玩具を目の前にした猫の様に目で肉棒を捕らえていた。

「はっ、はあ、はっあ、はあ、はあ」

肉棒の据えた臭いと垂れ出る我慢汁、これだけで哀は興奮し兎の尻尾がついた腰を左右に動かしていた。そして唾を飲み込み、一言。

「だ、旦那様、わ、私にオチンチンをくださいっ♡」

これでいいはず。こう言えば、きつと肉棒を、快楽をくれるはずと思っていた矢先。「それじゃあやれんな」

「え……？」

いつもだったら、合格と言つて肉棒を差し出してくれたはず。それなのに今日に限つてどうして……。

「カメラに向かって言うんだ。ハイレグをずらして、マンコを見せてけながら、『私はも

う旦那様のもので、帰ってきません』ってな」

なんで無情なことを言うのだろうか、この男は。いくらなんでもそれは……それは、はっ。

(お、オチンチンが貰えないなら、それくらいっ)

哀は決意して、男の隣で、バニースーツのハイレグをずらした。

ずらした先にあつたのは、愛液で濡れた彼女の割れ目。ヒクヒクと肉棒を求める筋だった。

「く、工藤くん、博士っ、みんな。ごめんなさいっ、わ、私は、もう戻れないのっ。

旦那様に犯されて、もう旦那様のじゃないとっ、我慢できないっ♡」

「よしよし、よく言えたな……第一部の御褒美な」

その言葉を聞いた哀は座った男の膝に寄りかかって、横から舌舐めずりをしながら。

「っああむっ♡」

待ちわびた様に勢いよく哀は男の肉棒をかぶりつくように、大きく口を広げ、ドクドクと脈動する肉棒を口内へと咥え込んだ。

「んちゅう、れろれろ、ぶちゅうんぢゆるっ、んぢゆるっ、れろ、ぢゅっ、んぢゅうっ！」

哀の激しい口淫は、口内全てを使って肉棒を愛撫していた。

亀頭からチンポの半ばまで咥え込み、頭前後に運動させていく。

「ずずずつ……ぢゆる、ぢゆぷんっ♡ ずじゅ、ぢゆるる……♡ んむつ、じゅぶつ、ぢゆるる、んちゅう、ぢゆ、ぢゆふう……ペろ、んんむ、じゆる♡」

肉棒の亀頭から出てくる我慢汁と肉汁を美味しそうに啜り飲み込んでいきながら、タコのように唇を尖らせ、頬をいっぱいに窄ませ、亀頭を力強く吸引する。

時に頬張り、ほっぺの内側に擦り付けながら舌を使つて責めていく。

「ぢゆるっ、ぢゆぶつ、ぢゆぶぶつ、ぢゆるるるっ」

堪らなく美味しい。男の肉棒を頬張り、肉の表面を唇と頬の内側で擦る度に苦い雄汁が哀の味覚を刺激させていく。

「ちゅぱちゅぱつ、んじゆるう、ずじゅつ、ぢゆるるるっ♡ く、くひょうくん、ごめん

なひやい、もう、わひやしは、このひちよの、んぢゅうううう、ちゅまに、なつたのお

♡ だ、だひやら、あなひやとの、かんひえいも、おひまい♡」

「そういうことだ、工藤新一。灰原哀はもう俺のものだ、お前の相棒じゃない。分をわきわえてもらうぞ……っ出すぞっ」

男は哀の頭を強く抑えて、肉棒をぐつと口内の奥に押し付けると溜まった獣性を解き放った。

「んぶ♡ んうんんくううううんっ♡」

「その通り。よく言えたから、続きをやるぞ」

互いに自分の顔が相手の性器の近くになるような体型で、互いの性器を刺激をしあっているよう。

推測なのは、バニースーツを纏った灰原哀が肉棒を内頬擦りを行っている映像だからだ。

「ずりゆつ、ずりゆりゆりゆつ♡　ぐぶつ、ぢゅぼおつ、ぢゅぶつ、ぐちゅつ、ぢゅるつ♡」

先日届いた二枚のDVD。

怪しさしかないDVDに警戒と好奇心が入り混じりながら、再生するとそこに写し出されたのは、淫らに乱れて男に欲情し肉棒に貪りつく灰原哀と自分と決別する言葉だった。

受け取り先の人間、江戸川コナンこと工藤新一は映像を観て絶望するも同時に興奮していた。

密閉された空間で、映像を見て自らを慰め、精液をティッシュに向かって噴き出す。喪失感と興奮。

名探偵という功績をもつ、その男は欲望を抑えることのできないようだった。

(……………第一部ということは)

コナンは傍に置かれたもう1枚のDVDに手を伸ばし始めた。

第二部DVD（終）

「んっ♡んんっ♡んんう♡」

ビデオカメラが録っているのは、ベットのの上にいる男とバニー姿の灰原哀。

彼女はいま背面座位で、両足を持ち上げられ、その小さな体と小さな肉壺が犯されていた。互いの体をしっかりと密着させ、子宮の奥まで男は自らの肉棒で容赦なく抽送していた。

「はああっ♡はあああっ♡ひっ、んんっ♡」

しかし、激しく抽送されているにも関わらず、哀の口からはよがり声が溢れこぼれていた。

ピストン運動が行われる度に、狭かった哀の肉壺は肉棒によって掘削され、拡張されていく。

律動に合わせて、兔の尻尾もふりふりと揺れる。同じようにバニースーツも激しく揺られて、幼胸と勃起した乳首も露になる。光沢のあるスーツに身に包まれた、弾力なある小さな下半身に腰を打ちかけられる度に、小気味よい音が鳴る。

「んうっあん♡ きもちひい♡ きもちひいよお♡」

「ははは、こりやいい。あの冷静なシエリーが善がるとはっ！ しかも、撮影されて、こんなバニースーツを着てなっ」

「んうっ♡ ひいいん♡」

「しかも後ろから抱っこされて、ちんぽを突っ込まれて善がるなんて、もしかしたらただの変態さんですかあ!?!」

「はああああああん♡」

男は哀の膺からぎりぎり抜くまでは引き抜いては、奥深くまで勢い良く挿入した。哀はポルチオまで刺激され、快楽に満ちた叫びを上げた。

「奥まで、届いて……っ♡ はああんっ♡ きもち、いいよお♡ も、もつと激しく、突いてえ♡」

快楽を求め、肉棒が抜けないように腰を振るうも、両足を持たれている為に思うように動かせない。しかし、それでも快楽を求めて互いに求め合う妖艶に動く。

足のつかない空中で何度も奥に肉棒が打ち付けられていき、潮と愛液が都度噴き出していく。

「んう♡ んんんっ♡ ん~~~~~♡」

グチュグチュと音を立てる音が聞こえる。男のカウパーと哀の愛液が混ざり合って

る音だ。しかし、その音ですらも哀にとっては心地よかった。

奥を突かれる度に、哀の頭は真白に染まり、おかしくなっていくが、それすら心地よかった。

「はひ、はひっ、あひい……♡ 子宮に届いてるのおっ♡」

快樂に浸り、既に腰は動けなくなつて、ただ喘ぎ声を上げて力なく男に寄りかかる哀。しかし、男はそんな哀を他所に道具のように動かし、膣を往復し奥を突っついていく。

「ふあああああつ♡ あつ、あひいいいいい♡」

哀の顔は蕩けきつており、常に悦びの体液を噴出している。

「あああああん♡ いい♡、きもちいいのおお♡ あん、んきゅうううううう♡」

何度目とも分らない絶頂に震え、舞い上がる哀の姿そして度重なる絶頂で引き締まっっていく膣に男はついに限界を迎えてしまった。

「っでるぞっ！」

子宮の奥を貫かんばかりに勢いよく突っ込んだと同時に、肉棒の亀頭から勢いよく精液が発射された。子宮を直撃し膣内にぶちまけられた。

「はああああああ♡♡、ザーメンきたあ♡ イク、イクうううう♡ んんんんんうううう♡」

精液の飛沫の衝撃に喘ぎながら、哀も何度目かわからぬ絶頂を迎えた。そして、男の

精液を余さず中へと注がれていく。注がれるたびに小さな哀の腹がバニー服でも分かるくらいに膨れていき、それを哀は見遣る。

収まりきらない量の精液が股間から垂れ流れるも、精液の熱さに浮かれて、哀は更に軽い絶頂を迎えていく。

「お♡ つひいいいい♡ いぐ、いつぐうう♡ きもちいいのおっ♡」

哀は抱え上げられつつ全身を震わせていく——やがて絶頂が収まったのか息も絶え絶えにしながらも顔を動かして男を見つめて一言。

「もつと、もつとお……♡」

男は哀をベットのの上に降ろしては、膝に哀の頭を乗せた。

「さて、掃除の時間だぜ、兔ちゃん？」

膣から抜かれた湯気の立つ衰えを見せない肉棒は、哀の鼻先に突き付けた。

「は、はいい♡ んはっ、ちゅば、ぴちゃぴちゃ♡ はあん♡ すっごい、匂いいい♡」

♡ ちゆるん、んくんく、でもっ、おいひ♡」

哀は勃起に舌を這わせて、こびりついた精液と愛液を嘗め尽くしながらも味わっている。淫蕩な笑みを浮かべて。

バニー姿の哀の柔らかな舌が這い回っていくくすぐったさを感じながらも、男は思い出したといわんばかりにベットに隠していた一枚の写真を画面越しでも見えるように

して取り出す。

「なあ、この写真はな、最初にフェラを奉仕させた時に撮影した写真だ。最初はこんなに怖い目つきだったんだぜ？」

「そ、それえれろん♡ らめえ、恥ずかしいのお♡ 見せちゃあ、いやあ♡」

「ダメダメ。しつかり見てもらおうじゃねえの、昔のお前と今の違いをよ」

写真には、刃物のように睨みつけている灰原哀の姿が映し出されている。

そして、カメラが捉えるのは、嘗ての刃物のように鋭かった過去の哀と、蕩けきった顔の哀。二つの顔のギャップが激しく、例え幼児趣味ではない男が見ても興奮を覚えるほど凄まじかった。

「さてと……お預けだ」

「んあ〜え？」

写真を投げ捨てては、男は肉棒を咥えこもうとした哀を引きはがした。

「〜っ、お、おちんちん、もっとおちんちんが欲しいのお♡」

瞳の中にはハートを描いており、不満げな表情を浮かべて男を見つめる。

「まだまだしたりないのは分かっているさ。だけど、続きはカメラに向けておねだりをしてからだ」

男の言葉に素直に頷いて、哀はM字に開き自分の秘所を両手で広げ、カメラに見せつ

け、そこから精液を垂れ流して懇願した。

「もつと、もつとバニーの哀を気持ちよくしてえ♡」

墮ちきつた兎は、貪欲な眼差しで発情した身体を差し出した。

* * * * *

『おお、おっ♡、おひん!? しゅ、しゅごおいいっ♡、ごつちゅん、つてついてりゅうううう♡』

電灯を消した真つ暗な部屋の中で小さな肉棒を抜いている。光源と言えば、テレビの光だけ。江戸川コナンは血走った目でその動画を見続ける。

淫乱となり、バニー姿でよがっている灰原哀と男のセックスを。

時に正常位、バック、座位など体位を変えているも、共通していることがある——それは全てのセックスにおいて視線は常にカメラに向けられているということだ。

『はあああああん! やう、くうううううう♡ おほおおおお♡』

正常位では舌を出して蕩けきつた顔を、バックではスーツからこぼれる幼い胸を、座位では秘所を、哀の全てを見せつけられていた。

しかし、それらよりももつと興奮したのは……背面座位の後に見せた過去と今の哀を対比した写真だった。

あのクールで睨みつけていた哀が、こうも墮ちるとは思いもしなかったし、一層に興奮したし悲しくもなった。

「っ灰原、灰原あ……っ」

相棒だった彼女が男の手に陥り、今となつては淫靡に満ちた男を求めるバニーとなつてしまった。

もう手を伸ばしても届かない場所に行つてしまった彼女を、コナンは求めてしまう。

『工藤君……私は、もうあなたと共に歩むことは出来ない。だから……さようなら——
チュッ♡』

最後に映つたのは、男とキスをする灰原哀の姿であつた。

その後に響く男女の盛り合う声だけがいつまでもコナンの鼓膜を震わせていた。こうしてコナンは、大切な人を失つたのだつた。